

【研究課題】

死後CT画像による体内貯留液量の評価法の確立と法医診断への応用

研究期間：2015年4月1日～2020年3月31日

はじめに：

頭蓋内出血例においては、病変の出血量が死因および死への寄与の評価に重要であるが、剖検による開頭後の定量は困難な場合が多い。そこで死後CTを用いた評価法を検討した。

対象：

行政解剖で内因性脳出血と診断された35例（男性32例女性3例。平均年齢56.7±13.8歳）。

方法：

解剖前に実施した0.6mm間隔の死後頭部CT画像につき、解析ソフトSYNAPSE VINCENTを用い、血液相当のCT値を抽出して出血の全量を算出した。

結果：

皮質下・被殻・視床出血27例の血腫量は8.8-207.3ml、平均100.4±56.3mlであった。脳幹出血8例の血腫量は7.3-46ml、平均22.1±18.3mlであった。

考察：

同じ脳出血であっても症例によって血腫量は異なり、死亡までの時間や死に至る病態が関連すると考えられた。

本法を用いた血腫量の算出は簡便であり、今後外傷性硬膜外・下血腫などへの応用が期待できる。さらに本作業によって3D再構築画像を同時に作成できるため、裁判員裁判等でのわかりやすい事例呈示への利用も可能である。